

活動名：屎尿・下水文化に関する研究・情報収集

上位目標	屎尿・トイレに関わる歴史や技術を伝え、屎尿に関する関心を喚起する。
活動目的	屎尿・トイレに関わる歴史や技術について、情報交換を図るとともに、記録として残す。
実践内容	「屎尿・下水研究会」（下水文化研究会の分科会）メンバー（最も多いとき30名余名）ならびに、メンバーの紹介により外部者を招いて、講話会を定期的に開催。講話会の内容は、先達からの聴き取り、古文書の解説、歴史資料の解説、技術変遷史など多岐にわたる。 講演録を業界雑誌へ投稿、さらに集積された内容を一般図書として編集・出版。
活動実施方法	実施体制；「屎尿・下水研究会」メンバーによる講話、企画、図書編集。 協力者・協力組織；研究会メンバーより招待された講話者
成果物	屎尿・下水研究会の活動成果として、 「トイレ考・屎尿考」（2003）、 「ごみの文化・屎尿の文化」 （2006、廃棄物学会ごみ文化研究会との共同編集）、以上技報堂出版 「トイレ 排泄の空間から見る日本の文化と歴史」（ミネルヴァ書房、2016） 「屎尿・下水研究会」の活動のほか、以下の下水文化叢書を刊行 「江戸 神田の下水」、 「川柳・江戸下水」、 「江戸の下水道を探る〈享保・明和・安永の古文書から〉」、 「江戸下水の町触集」、 「便所異名収攬」、 「歳時 下水道略史」、 「近世三都の水事情 大坂・江戸・名古屋」
成果の波及	波及の対象：一般市民 波及効果：屎尿・トイレ・排泄に関する個人的、社会的意味の再確認（衛生、保健、資源価値、尊厳）
継続するうえでの課題	利便性向上、社会インフラ整備により屎尿・トイレへの関心の希薄化活動を担う人材確保

#

#

屎尿・下水研究会の活動の歩み

1. はじめに一会の発足

浄化槽や下水道の普及とともに、屎尿の汲取り・処理・処分の仕事が縮小してきたため、屎尿・トイレに関わる歴史的事実や技術的成果の流れが忘れ去られようとしている兆しを感じて、石井明男・小松建司・地田修一・森田英樹氏等が屎尿研究会（のちに屎尿・下水研究会と改称）を平成10年に立ち上げました。その後（NPO）日本下水文化研究会の下部組織として位置付けられ、初代会長は地田修一氏、現・二代会長は石井明男氏が務めています。現在、会員は20名ほどで、トイレや家庭紙の研究者、下水道や清掃関係の行政経験者、教育関係者、業界紙関係者、コンサルタントなど多士済々です。

なお、この会の発足に繋がる先駆けた活動の中から生まれた成果品として、石井明男・栗田彰・小松建司・地田修一氏等の『江戸・東京の下水道のはなし』（技報堂出版、平成7年）並びに石井明男・稲村光郎氏等の『東京都の清掃技術 - その原点を語る』（非売品、平成12年）があります。

2. 講話会の開催

3か月に一回ほどのペースで、日頃なんとなく口にすることが憚られ、話題にし難い屎尿、トイレ、下水道などに関する講話会（例会としては70回余り、これに小平市ふれあい下水道館における市民向け講話会を含めると110回余り。質疑応答を含め2時間ほど）を開き、幅広くみんなで情報を交換し合っています。

例会の会場は、当初9回は参加人数も5～6名と少数でしたので本部事務室（新宿区富久町）で行っていましたが、平成13年度からは東京都ボランティア・市民活動センター（新宿区神楽河岸）会議室を借用するようになりました。その後、20～22年度は会員からの紹介を得て一時、（株）TOTOの会議室（新宿区西新宿）を利用しました。さらに20年度以降は、主に小平市ふれあい下水道館（小平市上水本町）の講座室で開くようになり、現在に至っています。

資料の準備ができた会員が講話者として手を挙げるということになっており、テーマの縛りもなく強制的にならないように心がけています。どのテーマも講話者の思い入れの強いものであり、また奥の深いものですので、毎回、熱のこもった講話会となっています。途中で聞き手からの質問や独自の解説などの飛び入りがあり、双方向の情報交換あるいは座談会といった雰囲気極めてアットホームな集まりです。会員から推薦された会員以外の方に講話をお願いすることもあります。

講話は、先輩の方々からの「聞き書き」、自分の体験記、古文書の現代語訳、文学・芸能からの引用、歴史資料の解説、最近の技術動向調査など、多岐にわたっています。

聴講者の理解を深めるため、講話の中で映画・映像を補助的に使用することもあり、ときには、

ずばり「劇映画に見る下水道」と云ったタイトルの例会もありました。広報映画の『生活と水』、『し尿のゆくえ』、『汚い!と言ったお嬢さん』や劇映画の『真夜中の河』などを鑑賞しました。

聴講された会員は、相原篤郎、安藤茂、石井明男、石井英俊、稲場紀久雄、稲村光郎、大庭克世、奥田照夫、菅家啓一、菊池隆子、栗田彰、小松建司、小峰園子、酒井彰、佐藤八雷、清水治、鈴木薫、鈴木和雄、鈴木直子、関野勉、高橋敬一、高橋邦夫、高村哲、谷口尚弘、地田修一、照井仁、鳥住英昭、中西正弘、中村正雄、中村隆一、平田純一、福田寛充、福田欣宏、藤森正法、保坂公人、堀充宏、松田旭正、森田英樹、山崎達雄氏等です。

3. 講話内容の文章化と業界誌への投稿

自分たち会員だけが自己満足した会ではいけない、講話会活動で得られた情報を関連した仕事に携わっている仲間にも知ってもらおうということで、講話内容を「屎尿研究会講話シリーズ」として『生活と環境』誌【(財)日本環境衛生センター】に、平成15年8月号から16年4月号まで9回にわたって連載しました。

さらにその後は、『都市と廃棄物』誌【(株)環境産業新聞社】に平成16年5月号から「トイレヨモヤモバナシ(四方八方話)」と題して連載中です。平成30年7月号で113回目になりました。

4. 声のライブラリーの保存

屎尿・下水研究会でストックしているものに「声のライブラリー」があります。毎回の講話を録音し、これを長期間保存するためにCD化したものです。勿論、なにも手を加えていない肉声のアルバムです。話口調の癖や間の置き方などは三者三様です。

5. 見学会の実施

文献、聞き書き、映像からの情報収集に止まらず、日帰りあるいは一泊の見学会を実施し、ジオラマ・実際の建物にあるトイレの模型・実物、時には処理施設を見聞するとともに、会員相互の交流を図ってきました。

① 新宿歴史博物館(平成15年8月12日)

甲州街道の第一番目の宿場・内藤新宿の町並みを再現した大型ジオラマの中に、街道筋の建物の裏に「外トイレ」が置かれていることを発見し、更にその数の多さにまたびっくりしました。馬の背に積まれて運ばれている肥桶もちゃんと再現されていました。

② 江戸東京たてもの園(平成15年10月5日)

本園は、文化的価値の高い建物(農家、商家、住宅など20数棟)を移築し、復元・保存・展示している野外博物館です。民具、商品の陳列棚、家具などとともに、トイレも復元されています。その建物が建っていた時代の生活を擬似体験できました。

③ 会津武家屋敷、喜多方蔵の里、大内宿の町並み(平成16年8月22～23日)

福島県会津地方に実家のある菅家啓一氏の案内で、車2台に分乗して標記建物を見学しました。実物(復元物を含む)の持つインパクトは圧倒的で、まさに「百聞は一見に如かず」でした。

会津藩家老屋敷では、上便所(藩主用で、畳3枚敷きに黒漆塗りの大便器を設置。引出し式砂雪隠、箱車)や家老家族用の下便所(板張り。汲取り式の大使用、小使用)や女中用の下便所(一畳

ほどの広さ。汲取り式の大使用が二つ)を、また、代官の中畑陣屋では、奥座敷の棚の真裏にある上便所(木製便器)や下便所(床板の中央部を切り落した四角い穴が開いており、金隠しの板はない)を見学しました。

喜多方の冠木(かぶき)薬店で、中庭に現存する廁蔵【蔵造りで男性用と女性用が別々)、男性用小便所は廁蔵と主屋との間の庇部分にある】を見せてもらいました。

④ 市原市・下水関連処理施設(平成18年2月28日)

公共下水道の処理場のほか尿尿処理場や農村集落排水の処理場を、地元の菅家啓一氏の案内でマイクロバスを使って効率的に見学しました。

松ヶ島終末処理場では下水を標準活性汚泥法と硝化促進型嫌気・無酸素・好気法とで、臨海衛生工場では汲取り尿尿及び浄化槽汚泥を(尿尿:標準脱窒素処理+凝集沈殿処理+汚泥処理。浄化槽汚泥:前曝気+固液分離)法で、月崎浄化センターでは農業集落排水を回分式活性汚泥法(無人自動運転)で、それぞれ処理していました。

⑤ INAXライブミュージアム・常滑市民俗資料館・常滑市立陶芸研究所(平成18年10月28~29日)

INAXライブミュージアムの初代館長・柿田富造氏(元本会会員)の配慮により、標記施設の見学をはじめ、古くからの焼物の町を、窯場やレンガ造りの煙突や土管・瓶が積み重ねられている風景を楽しみながら、散策することができました。また、学芸員・中野晴久氏の陶管・衛生陶器に関する講話により、常滑焼への見聞をさらに深めることができました。明治に入り、「鉄道用土管や公共下水道用土管は常滑産でなければならない」との世評のもと、土管製造が発展していったとのことでした。

⑥ 旧三河島污水処分場唧筒(ポンプ)場(平成20年3月27日)

標記の施設が平成19年12月に国の重要文化財(建造物)に指定されたことを記念して、この日に一般公開されました。往年の写真などがパネルで展示されているレンガ造りのレトロな施設を巡りました。70年以上、都民の衛生を支えてきた施設が保存されることは、近代下水道発祥の礎が遺ることであり、折りにふれて原点に立ち返ることができ大変意義深いことです。

⑦ 塩原・天皇の間記念公園、青木周蔵那須別邸(平成21年8月8~9日)

塩原・那須に土地感のある小松建司氏の案内のもと、全行程車で標記施設を見学しました。塩原温泉入口にある天皇の間記念公園には、明治、大正、昭和の三代にわたり、天皇はじめ多くの皇族が避暑のため利用した「塩原御用邸」の一部が移築・保存されています。便所は、畳敷きで木製の和風便器です。便器の下には便壺がなく、引出し式の箱の中に「おまる」が置かれ、出し入れできる仕組みになっていたと言います。外から見ると、便所の下部は観音開きで、同じ形式の便所が二つ並んでいました。館内の音声説明は、この便所の使用方法にまで言及していました。

道の駅・明治の森黒磯の整備に合わせて、近くにあった「青木周蔵那須別邸」が移築・復元されていました。初期の建物の間取りを復元したため、便所は付いていませんでした。資料によると、初期の別邸には洋風の腰掛け式の便器(便座の下に尿尿を受けるバケツ状の受け器があり、背もたれの中に砂を収容してあった)が使われていたと言います。建築主の青木周蔵が外交官で外国暮らしが長く、また夫人がドイツ人であったことからと思われます。

6. ホームページの開設

尿尿や下水は、限りなく生活に密着し生活の一部になっているが故に、かえって文字に書き残されることがほとんどありません。トイレの水洗化が90%に達した現在、私たちが生きるために食べた後に毎日必然的に排泄される「尿尿の行方」について無関心になりつつあります。そこで、私たちの講話会活動の中で得られた情報を多くの一般の方々にも知っていただきたいと考え、ホームページを開設しました。小松建司氏が更新等の管理をしています。

「尿尿・下水研究会」にアクセスしていただければ、これまでの講話のダイジェストをご覧になることができます。

7. 小平市ふれあい下水道館における市民向け講話会

尿尿・下水研究会では平成20年度より、小平市ふれあい下水道館（小平市上水本町）とタイアップしてトイレ、下水道、廃棄物、水環境などに関連した市民向け講話会（中休みを含め2時間ほど）を10月～翌3月の毎月1回、年に6回の頻度で開いています。講師は主に本会会員ですが、それぞれの分野の専門家に依頼することもあります。聴講対象は市内に在住あるいは勤務・在学している者としていますが、席に余裕がある場合はそれ以外の方も可としています。私たち研究会会員はこの枠で参加しています。平成28年度まで合計52回実施されました。

玉川上水沿いに建つ「ふれあい下水道館」は、地上2階・地下5階建てで、地下25mに埋設されている内径4.5mの実際の下水道管に入ることのできる「ふれあい体験室」を有する下水道博物館です。講話会は地下1階にある講座室（定員25名）で行っています。

会員のみを対象としてきた今までの講話会を発展させた出前講座としての性格を有しています。ちなみに、小平市は日本下水文化研究会の古くからの賛助会員（公共団体では唯一）です。国内の話題ばかりでなく、年に1回は海外の情報も提供するよう心掛けています。上から目線であれば環境教育ですが、むしろ、会員自らが研鑽して得た情報をわかりやすく一般の方々に披露する場であると考えています。

なお、別途ふれあい下水道館が企画している「夏休み親子下水道教室」において、石井英俊氏が「マンホール蓋のデザイン」に関し、毎年テーマを変えて分かり易く解説しています。更に期間限定の特別展示において、関野勉氏が「トイレグッズ」を、石井英俊氏が「マンホール蓋の写真」をそれぞれ出品されています。

8. 文化資料の作成と出版活動

尿尿・下水研究会は、会員ないし会員より推薦された方々に、講話・講演もしくはインタビューをお願いし、「声のライブラリー」や「専門雑誌等への投稿記事」によりその記録を残すことを活動の主体に置いてきました。

これに加えて、平成20年度からは、「尿尿・下水研究会文化資料」シリーズを自主的に作成し、研究会会員あるいは会の活動趣旨に賛同された会友に配布しています。出版社からの図書の刊行にはテーマ、時間など多くの制約条件があり、この簡易な印刷・製本による文化資料は、その点をカバーするものです。

今までに、『トイレと下水道の歴史』（森田英樹、栗田彰、地田修一）、『水琴窟探訪』（中村隆一）、『論

考-トイレと下水道』(平田純一、新保和三郎)、『下水道マンの東京散歩-職場界隈探訪』(小松建司、高橋敬一、地田修一)、『乗り物のトイレ』(松田旭正、清水治)、『家庭紙とトイレグッズ』(関野勉)、『トイレの歴史と探訪』(森田英樹)、『ふれあい下水道館と環境講座』(文責:地田修一)並びに『屎尿・下水研究会20年の歩み』(文責:地田修一)の9冊を作成してきました。この文化資料の先駆けと云えるものとして平成18年に、英文冊子『Toilet and Night Soil』(『トイレ考・屎尿考』より7話をピックアップ)を作成しています。英訳は石井明男、鈴木清志、中尾正和(非会員)の各氏にお願いしました。

幸いにも、各種雑誌への投稿記事が技報堂出版の目にとまり、『トイレ考・屎尿考』(平成15年)及び『ごみの文化・屎尿の文化』(平成18年)が刊行され、この分野の専門家ばかりでなく広く一般の方々へ向けて情報を発信することができました。

さらに新たにミネルヴァ書房からシリーズ・ニッポン再発見の一巻として、屎尿・下水研究会編著『トイレ-排泄の空間から見る日本の文化と歴史』が平成28年に出版(その後翻訳本が台湾の出版社から刊行)されました。この本作りにおいて編集のプロ集団「こどもくらぶ」の手を借りましたが、この縁で図らずも、児童向け図書『トイレの自由研究』(フレーベル館、全三巻、こどもくらぶ編、平成28年)の監修者としても関わることができました。

なお、個人的活動ではありますが、会員が独自に執筆・刊行した単著書としては、石井英俊氏の『マンホール』(ミネルヴァ書房)、稲村光郎氏の『ごみと日本人』(ミネルヴァ書房)、栗田彰氏の『落語地誌-江戸東京・落語場所集成』(青蛙房)・『江戸の川あるき』(青蛙房)・『江戸の下水道』(青蛙房)、山崎達雄氏の『洛中塵捨場今昔』(臨川書店)・『ごみとトイレの近代誌』(彩流社)があります。また、関わりの度合いの深い共著書としては、石井明男氏の『クリーンダッカ・プロジェクト-ゴミ問題への取り組みがもたらした社会変容の記録』(佐伯印刷出版事業部)があります。

9. 例会の講話タイトル及び会刊行本の執筆タイトル

例会の講話タイトル及び会刊行本執筆タイトルを、会員別に列挙します。

- 相原篤郎「平安・鎌倉における屎尿にまつわるよもやま話」(例会)
- 安彦四郎「劇映画に見る下水道」(例会、ごみの文化・屎尿の文化)
- 安藤茂「市井にあって環境衛生を考えた西原脩三氏を語る」(例会、ごみの文化・屎尿の文化)
- 石井明男「史料にみる東京の屎尿処理の変遷」(例会、ごみの文化・屎尿の文化) / 「途上国におけるトイレ建設から下水道の整備に至る段階的整備について」(例会、ごみの文化・屎尿の文化) / 「パレスチナ・ヨルダン川西岸の廃棄物処理改善ほか」(例会) / 「ごみ処理と地域特性」(例会) / 「狂乱-浦安の舞」(トイレ考・屎尿考) / 「インドネシアの屎尿事情」(トイレ考・屎尿考) / 「屎尿汲取り業を顧みる」(トイレ)
- 石井明男・齋藤健次郎・菊池隆子「日本の水処理の基礎を築いた柴田三郎博士」(例会)
- 石井英俊「銀輪で集めたマンホール蓋のデザイン」(例会)
- 稲場紀久雄「旧下水道法制定の経緯」(例会)
- 稲村光郎「大正八年の屎尿問題-その定量的検討」(例会、ごみの文化・屎尿の文化) / 「ごみの変遷」・「平安京の清掃行政」・「中世の使い捨て文化」・「水に捨てる文化」・「振袖火事伝説の成

- 立」・「江戸のハウス栽培」・「二枚の絵 - 深川十万坪と湯島ごみ坂」(ごみの文化・屎尿の文化)
- 河村清史「屎尿処理技術の動向」(例会、トイレ考・屎尿考)
 - 菅家啓一「地方都市における下水道整備の経過並びに中国広州方面への視察報告」(例会)
 - 楠林勝二「屎尿という文字の探求」(例会、ごみの文化・屎尿の文化)
 - 栗田彰「江戸小噺から拾った雪隠と屎尿」(例会、ごみの文化・屎尿の文化) / 「町触にみる江戸の小便所」(例会) / 「江戸川柳に詠まれている便所と屎尿」(トイレ考・屎尿考) / 「落語から便所と屎尿の噺を拾う」(トイレ考・屎尿考)
 - 小松建司「便所の神様」(例会、ごみの文化・屎尿の文化、トイレ)
 - 小峰園子「農村改善運動とトイレ・上下水道」(例会)
 - 酒井彰「バングラデシュでエコサントイレをつくる」(例会)
 - 佐藤昭典「屎尿汲取りの移り変わり - 仙台市から」(トイレ考・屎尿考)
 - 清水治「列車のトイレ」(例会、トイレ) / 「世界の列車トイレの現状」(例会)
 - 新保和三郎「東京・下水道よもやま話」(例会)
 - 鈴木和雄「東京市綾瀬作業場概要」(例会、トイレ考・屎尿考) / 「糞尿史 - 遷都は糞尿汚染からの逃避だった」(例会) / 「衛生に関わる生活と奇習」(例会) / 「海洋投棄とその歩み」(例会、トイレ考・屎尿考) / 「屎尿の処分と処理の移り変わり」(トイレ考・屎尿考) / 「糞便の排泄機構」(トイレ考・屎尿考)
 - 鈴木清志「世界のトイレ見聞記」(例会) / 「世界のトイレを旅する」(例会、トイレ考・屎尿考)
 - 関野勉「下水とトイレトペーパー」(例会、トイレ考・屎尿考) / 「トイレのグッズ」(例会、ごみの文化・屎尿の文化) / 「世界のトイレ博物館を巡って」(例会、ごみの文化・屎尿の文化) / 「トイレマナーとトイレ文化」(例会、ごみの文化・屎尿の文化) / 「ユニークなトイレマーク」(例会) / 「拭う紙・捨てる紙」(トイレ) / 「トイレトペーパーの歴史」(トイレ)
 - 竹島正「消えゆく下水処理設備を映像に残す」(例会)
 - 谷口尚弘「米元晋一と当時の最先端技術 - 合理式と散水濾床法の導入」(例会)
 - 地田修一「屎尿の嫌気性消化処理と消化汚泥のコンポスト化について」(例会、トイレ考・屎尿考、トイレ) / 「郷土史料に見る下肥の流通と肥舟」(例会、トイレ考・屎尿考、トイレ) / 「英仏における水洗便器の技術開発史」(例会、トイレ考・屎尿考) / 「写真を読む - 管渠の建設と清掃」(例会) / 「航空写真にみる処理場用地」(例会) / 「屎尿の文章表現 - 文芸作品から」(トイレ考・屎尿考) / 「高野六郎の言論活動と実践 - 改良便所」(ごみの文化・屎尿の文化) / 「昭和十年代の東京における屎尿処理」(トイレ)
 - 地田修一・稲村光郎「工藤庄八氏と武藤暢夫氏の屎尿処理分野における活動と貢献」(例会)
 - 中村隆一「水琴窟を訪ねて」(例会) / 「農村から見た都市屎尿処分問題」(ごみの文化・屎尿の文化)
 - 中村隆一・地田修一「大正末・昭和初期の屎尿事情」(例会、トイレ考・屎尿考)
 - 平田純一「衛生陶器のできるまで」(例会) / 「しゃがむ姿と日本人」(例会、ごみの文化・屎尿の文化) / 「欧米における水洗便器の発達」(トイレ考・屎尿考) / 「大倉孫兵衛・和親親子と衛生陶器」(ごみの文化・屎尿の文化)
 - 平田純一・地田修一「川柳と俳句にみるトイレ・屎尿」(例会)

- 保坂公人「バングラデシュのエコロジカル・サニテーション」（ごみの文化・屎尿の文化）
- 堀充宏「都市近郊における下肥の利用」（例会、ごみの文化・屎尿の文化）
- 松田旭正「船の便所に関する話題」（例会、トイレ）／「明治の改革にみる屎尿の文明開化」（例会）
- 森田英樹「都繁昌記（天保九年）に見る汲取り」（例会、トイレ考・屎尿考）／「トイレ異名と総合トイレ学」（例会、トイレ考・屎尿考）、「絵画に見るトイレ」（トイレ考・屎尿考）／「十字號糞倍例」（トイレ考・屎尿考）／「トイレに関する文献紹介」（ごみの文化・屎尿の文化）／「間取りから見るトイレの歴史」（ごみの文化・屎尿の文化）／「トイレ研究史と総合トイレ学の提唱」（ごみの文化・屎尿の文化）／「李家正文-「厠考」の出版と厠学の誕生」（ごみの文化・屎尿の文化）／「江戸時代の便所」（トイレ）／「豚便所フル」（トイレ）
- 柳下重雄「江戸の下掃除代金の高騰に見る行政の対応」（例会、ごみの文化・屎尿の文化）
- 山崎達雄「京都の屎尿事情」（例会、トイレ考・屎尿考）／「有料トイレのルーツ」（例会、トイレ）／「トイレトペーパーの初めての新聞広告」（トイレ）
- 山野寿男「上下水道に関する言葉の起源」（例会）
- 渡辺健「厠と屎尿の法制史」（トイレ考・屎尿考）

なお、会員以外の方の講話・執筆は次のとおりです。

高杉喜平「屎尿汲取り業の一代記」（例会、トイレ考・屎尿考）／広瀬祐「有機性廃棄物のリサイクルと農業利用」（例会）／長谷川清「下水管の清掃業に転身して」（例会）／工藤庄八「バキュームカーの開発」（トイレ考・屎尿考）／佐野丈夫「屎尿積み替えと貨車輸送」（トイレ考・屎尿考）／内藤泰三「みやこ肥料-コンポスト化」（トイレ考・屎尿考）／山中章「籌木とは-長岡京のトイレ跡から」（トイレ考・屎尿考）／佐々木裕信「浄化槽法制定の経緯と現状」（例会、ごみの文化・屎尿の文化）／小野川尊「発展途上国における屎尿由来の寄生虫事情」（例会、ごみの文化・屎尿の文化）／八木美雄「楠本正康先生、簡易水道と浄化槽と」（例会、ごみの文化・屎尿の文化）／仲光克顕「江戸遺構にみる町屋の下水」（例会）／神山圭一「屎尿処理技術の歩み」（例会、ごみの文化・屎尿の文化）／上田恵一「ヨルダンにおける下水処理水の灌漑利用」（例会）／齋藤健次郎「ロンドンの下水道とバザルゲットの業績」（例会）／幹事会「研究所蔵ビデオの放映」（例会）／大島善徳・ひろゆうこ「トイレのひみつ刊行のいろいろ」（例会）／田中修司「下水道管路管理の課題」（例会）／野田功「くらしと飲み水」（例会）／岩堀恵祐「改善された富士山トイレ問題」（例会）／八木美雄「城と上下水」（例会）／蛭田廣一「玉川上水と小平」（例会）／武藤暢夫「戦後開発された屎尿分離式トイレ」（ごみの文化・屎尿の文化）／紺野武郎「資源回収業界の変遷と現状」（ごみの文化・屎尿の文化）／松藤康司「日本の埋立てを変えた福岡方式」（ごみの文化・屎尿の文化）／溝入茂「岩橋元亮-ごみ焼却の先駆者」（ごみの文化・屎尿の文化）

10. 市民向け講話会のタイトルと講師

小平市ふれあい下水道館における市民向け講話会のテーマ別一覧（平成20～28年度、52回）は、以下の通りです。

【会場に関する講話】

- ①ふれあい下水道館の役割（松田旭正）

【トイレに関する講話】

①日本のトイレ発達史（森田英樹）②生活改善運動とトイレ・上下水道（小峰園子）③トイレの神様（小松建司）④トイレからしゃがみ文化と腰掛け文化を探る（平田純一）⑤トイレトペーパーの歴史（関野勉）⑥家庭紙とトイレグッズ（関野勉）⑦下肥が作った江戸野菜（堀允宏）⑧改善された富士山トイレ問題（岩堀恵祐）⑨列車トイレのうつりかわり（清水治）⑩船のトイレ（松田旭正）⑪温水洗浄便座の開発秘話（木内雄二）⑫開発途上国の環境・衛生支援を考える（森田昭）⑬有料トイレのルーツ（山崎達雄）⑭大名行列とトイレ事情（松田旭正）⑮俳句にみるトイレ・下水（地田修一）⑯絵葉書と新聞広告にみるトイレの今昔（山崎達雄）⑰トイレ探訪の話（森田英樹）⑱外国人観光客のトイレ対策ほか（白倉正子）⑲大名行列とトイレ事情（Ⅱ）（松田旭正）

【廃棄物に関する講話】

①日本のリサイクルの歴史（稲村光郎）②東京におけるごみの埋立て（根本康雄）③発展途上国におけるごみ処分対策（石井明男）④ダッカをきれいに - ゴミ処理への技術援助（石井明男）

【下水道に関する講話】

①江戸の下水道（栗田彰）②明治以降の東京における下水道整備のあゆみ（地田修一）③東京・下水道よもやま話（新保和三郎）④管渠清掃のうつりかわり（地田修一）⑤下水道マンホール蓋の教えてくれること（石井英俊）⑥古代遺跡にみる上下水道（中西正弘、清水治）⑦エクアドルの水（福田寛允）⑧下水道マンの東京散歩（高橋敬一・小松建司・地田修一）⑨水再生センターに集まる鳥たち（水口忠行）⑩下水道マンの東京散歩 - 立川、国立、小平（地田修一）⑪下水処理技術の発展（佐久間真理子）⑫台所のディスポーザと下水道（清水治）⑬水再生センターの自然と水辺の生き物（岡村智則）⑭城と上下水（八木美雄）

【水道・水環境に関する講話】

①くらしと飲み水（野田功）②玉川上水と清流復活事業（地田修一）③東京の都市河川の現状 - 主に神田川水系と玉川上水（保坂公人）④身近な水辺に生きる水生昆虫と魚（安齋純雄）⑤弁天様と水（栗田彰）⑥水琴窟を訪ねて（中村隆一）⑦水環境と農業（田中康男）⑧昆虫と人間との関わり - 天敵農薬と音楽の観点から（柏田雄三）⑨ミミズの話（柴田康平）⑩玉川上水と小平（蛭田廣一）

【バングラデシュのエコサントイレに関する講話】

①開発途上国の水と衛生の現状と改善（酒井彰）②バングラデシュ農村でのトイレ作り（高村哲）③衛生普及活動に活用する短編動画の作り方（高村哲）④デザイナーバングラデシュで便所作り走る（高村哲）

11. おわりに - 他団体とのコラボ

『トイレ考・尿尿考』を刊行したことが縁となり、特別展『肥やしのチカラ』を企画していた葛飾区郷土と天文の博物館の学芸員・堀充宏氏と専門調査員・小峰園子氏とにお目にかかる機会を得、平成 17 年の展示・図録・講演会に関与（鈴木和雄、関野勉、平田純一、森田英樹、地田修一の各氏）することができました。さらに、この企画の第二弾・特別展『肥やしの底チカラ』（平成 25 年）の際にも同様に参画（山崎達雄、平田純一、森田英樹、地田修一の各氏）することができました。

また、花巻市で開催された岩手県主催・「水環境と暮らしのフォーラム」からの講師派遣要請（平成 15 年）や（NPO）富良野自然塾（倉本聡塾長）からの対談要請（平成 20 年）があり、ともに地

田修一氏が現地に赴き対応しました。

『月刊下水道』（平成 15 年 7 月増刊号）に、鈴木和雄・栗田彰・柳下重雄・森田英樹の各氏が江戸の町の飲み水・トイレ・下水道に関し分担執筆しています。

さらに、郷土史誌『多摩のあゆみ』（たましん地域文化財団、平成 19 年 5 月）からの原稿依頼を受け、特集テーマ「多摩の下水道」のもと、北川知正・栗田彰・地田修一・松田旭正・柳下重雄の各氏が執筆しました。そして、雑誌『怪』（角川書店、平成 21 年 11 月）の特集・「土俗神」に関連して廁についての寄稿が求められ、森田英樹・地田修一両氏の連名で「廁の変遷と屎尿の位置づけ」を著しました。

また、ここ十数年来、年に 1 回『生活と環境』（日本環境衛生センター・機関誌）の随筆欄・「散歩みち」への執筆依頼があり、地田修一氏と森田英樹氏とがトイレに関する話題を提供しています。加えて、下水管路維持管理の専門情報誌「かんろかんり」【(株) カンツール発行】に、栗田彰氏が古今の下水にまつわる話について、地田修一氏が管渠の工事・清掃に関し、関野勉氏がトイレに困む話題を、それぞれシリーズで投稿しています。

これらとは若干趣きが異なりますが、『新世』【(社) 倫理研究所・機関誌】の記者からトイレや下水道についての取材を受け、地田修一・石井英俊・森田英樹の三氏が対応し、平成 21 年 5 月号からのシリーズの中で「トイレの歴史を知ろう」、「トイレで流した排泄物の行き先?」及び「トイレの呼び名いろいろ」のインタビュー記事となっています。

こんなエピソードも。平成 22 年に植村花菜の歌「トイレの神様」が流行り、NHK・紅白歌合戦にも出場しましたが、『ごみの文化・屎尿の文化』の「トイレの神様」の執筆者・小松建司氏のとこに、二つの女性週刊誌からトイレの神様の風習に関し取材があり、それぞれの誌の記事の一端を飾っています。

日本トイレ協会（何人かの本会会員が属する）が刊行した『トイレ学大事典』（柏書房、平成 27 年）の執筆者として、関野勉・地田修一・平田純一・森田英樹の各氏が参画しています。

本会の賛助会員・小平市「ふれあい下水道館」には、下水道や水環境に関する一般向け・児童向けの図書を集めた図書室（収蔵図書数約千冊）が設けられていますが、屎尿・下水研究会では会で刊行した図書並びに各会員の蔵書を寄贈し、トイレや下水道に関わる図書を保存・公開する場の充実に協力しています。同様に、東京都水道局・水道歴史館図書室や東京都下水道サービス（株）・アーカイブス資料室やたましん地域文化財団・資料室などにも刊行本・文化資料等を随時、寄贈しています。

（地田 修一）